

トピックス

緊急スピーチ（要旨）立花 隆



問題提起として、一つお話ししておきたいことがあります。それは、平成 21 年 11 月に実施された“事業仕分け”の問題です。私は自然科学研究機構の経営協議会委員でもありますので、自然科学研究機構あるいは核融合科学研究所(以下、核融合研)の状況を理解しております。昨秋の仕分け第 1 弾では、自然科学研究機構予算減額の大部分が核融合研であり、平成 22 年度予算から約 5 億円が削減されました。現在、民主党の人氣が急速に落ちていることから、人氣回復をはかるためとしか思えない事業仕分け第 2 弾が予定されております。その対象は、再度サイエンス関係、それも独立行政法人関係を厳しく仕分けるとのことです。特に、理化学研究所に対する対応は非常に厳しく、スーパーコンピュータ（以下、スパコン）のみならず大型放射光施設（SPring-8）などにも既にプレヒアリングなどが行われているようです。自然科学研究機構にも再度厳しくあたると言っています。詳細は不明ですが、そのようになっております。

今の民主党政権には基本的に科学技術政策がありません。それはマニフェストを見ればすぐ分かるのですが、一般に渡っておりマニフェストの中には科学技術に関してはゼロです。「インデックス」という相当ページ数がある資料（民主党政案集 INDEX2009）に、ようやく科学技術に関することが出てきますが、ほんの僅かです。その中で、科学技術基本政策を遂行する主体である現在の総合科学技術会議そのものを改組し、科学技術戦略本部（仮称）を内閣総理大臣のもとに設置するとの記述がありますが、具体的にどうするかということとは書かれておりません。そのため現在、総合科学技術会議そのものが機能不全に陥っており、日本の科学技術政策そのものが全体的に全く動けない状態にあると言えます。議論すべき課題は積み上がっているのですが、進めることが出来ないのです。ボトムアップの議論は相当積み上がっているのですが、トップの体制そのものが整っていないのです。先日出た朝日新聞の記事のとおりです。

核融合科学研究所の核融合研究は、これまでの実験はユニークで新しい成果を次々出してきましたが、これからもそれを継続するためには実験を更に続け、LHD のデバイスも新しいものに替えていく必要があります。しかし、自然科学研究機構の予算が相当削減され、その大部分が核融合研という現状では、その継続を困難にする心配があります。

さて、社会の理解を得ることの重要性が、先のスパコンの件でも明らかになりました。研究を続けて行くためには、社会にアピールし続け、社会の共感を得ることが極めて重要となります。そのため、これからますます社会と核融合に関するクラスター活動を重要視する必要があります。

私は先日、都内の根津小学校に行き授業を行いました。その内容は NHK で 5 月に放送される予定ですが(補：5/1NHK 総合にて午前 9:00～放映)、その中で核融合の話が出ました。小学校の教科書に核融合について書かれているわけではありません。私が「人類よ、宇宙人になれ」という十数年前に書いた内容が小学校の教科書に載っています。根津小学校の熱心な先生が、それにつ

いて十数時間もかけて授業を行い、児童達に書かせた作文を私に送ってきました。その作文では小学生が色々な議論を行っております。その意見のマジョリティは、地球が環境破壊で壊れつつあるということであり、それが共通認識になっているのですが、ではどうすれば良いのか。その中に、地球規模の環境問題の対策としてユニークな意見がありました。それは「第二の太陽（人工太陽）」を作るというものであり、それが環境問題対策の意見として多数を得たのです。その小学生が述べている内容は「最近、韓国に研究所が建てられ、プラズマが作られた。それが第二の太陽を作る計画の元となる。」というのです。つまり核融合です。そこで私はこんなことを述べました。韓国より日本こそ核融合の研究が世界で一番進んでいる国の一つであり、韓国で作られたプラズマよりもはるかにすばらしいプラズマが日本ではずっと前から作られている。世界の核融合計画には ITER（国際熱核融合実験炉）や NIF（国立点火施設、米国）もあり、第二の太陽を作るという計画が本当に着々と進んでいる。21 世紀はその核融合ができるかどうか世界人類の運命がかかっているのです、と(補：実際の放送では、このくだりは編集でカットされた)。

このように小学生の一部にも核融合の必要性に関する知識がある程度伝わっているわけです。このような形でさらに広がっていけば第二の太陽（核融合）は我々人類にとって必要であると国民的理解が得られます。小中学生にでも理解されるように努めなければ、スパコンの二の舞になってしまいます。事業仕分けでスパコンと同じ事態が起きたときに、核融合の世界を誰が助けてくれるかといえば、今のままではゼロだと思います。そうならないように、広い理解を得る努力を今後ますます払っていただきたいと思っています。